

いのち
寿命を生きた人 中村久子

三島
多聞

目
次

■ 「中村久子女史に学ぶ」という視点	1
■ 「寿」と「命」	2
■ 両手両足の切断という絶望の淵から	11
■ 人間になりたいという叫び	22
■ 現実を引き受ける	30
■ 真実の人・親鸞聖人に出会う	41
■ 「本当の光」を灯す	46
■ 本当の幸せ	52
あとがき	57

■ 「中村久子女史に学ぶ」という視点

こんにちは。三島多聞と申します。中村久子さんの故郷・飛驒の高山から来ました。今日は「中村久子女史に学ぶ」と題し、念仏者中村久子をおしてお念仏を学びたいと思います。

久子さんは明治三十年に生まれました。生きていらっしやれば百歳を優に超えるでしょうか。三、四歳の時に両手両足を切断しました。しかし、その障がいを抱えながら、朗らかに元気に生きた人です。それだけでしたら「立派な人もいるもんだな」で済むのですが、久子さんは聞き捨てならないことを言われたのです。それは「両手両足のないのがあります」と。「両手両足のないのが私を救った。両手両足のないのがあります」と。これは、どなた様に聞いても、両手両足のな

いのがありがたいという人なんて一人もないのではないのでしょうか。

現実には、子どもが生まれる時に「男がいい」「女がいい」と言っておりますけれど、いよいよ最後になれば、「男でも女でもいい、五体満足に生まれてほしい」というのが、東西を問わず世の親の願いというものですね。いわゆる人間というものの願いは「満足」です。我々は満足を求めて生きている。にもかかわらず、「両手両足のないことが満足なんだ、ありがたいんだ」と、どうして言えるのか。ここが重大な問題です。

■「寿」と「命」

私たちは満足を求めて生きています。精神的にも肉体的・物質的にも満足というものを求めている。特に物質的満足に重点をおいた生活をし

ていますね。しかし、精神的満足がいかに重要であるかということを経験した人は我々に教えてくださっています。

五体満足であっても、こころが満たされないというものがあるのです。どこまでも満たされることはない、それが人間なのかもしれません。しかし、本当の精神の満足に出会う時、どのような身であってもありのままの自身に喜んでいける世界が開かれる。久子さんの生きざまは、私たちにそのことが人間にとっていかに大事であるかということを教えてください。

このたびの宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌のテーマは「今、いのちがあなたを生きている」というものです。その「いのち」とは何か。「いのち」を漢字で書くとよくわかります。漢字で書くと「寿命」と書きま

すが、だいたいこの「寿命」という言葉が誤解されています。誤解されているところから、いくら「いのち、いのち」と言っても、いっこうに「いのち」の問題がピンと響かない。

精神上のいのち、肉体上のいのちということがあります。「いのち」は精神的満足、肉体的・物質的満足を求めているものです。お父さん、お母さんから授かった「いのち」、それは肉体上の「生命」で物質です。物質には限りがあります。肉体上のいのちは長い（長命）短い（短命）によって限定される「いのち」、いわゆる限りある「いのち」です。

では、「寿」というのは何か。「長寿」と言い、あるいは「天寿」とも言う。しかし「短寿」とは言わない。短寿という言葉は聞いたことがありません。寿は「ことぶき」、「喜び」です。この「寿」というのは、長

短に限定されない「いのち」、比較されない「いのち」。比較を超えた「いのち」。限りなき「いのち」です。

この「寿命」の「命」は父母から授かった「いのち」ですから、長命短命ということがある。限りある「いのち」。しかし「寿命」の「寿」は「喜び」の「いのち」です。長い短いによって限定され、比較される「いのち」ではない。いわゆる「限りなき喜びのいのち」です。「限りなき」というのを仏教では無量という。無量の、量りなき「いのち」「喜び」、これを「無量寿」といいます。ですから、お父さん、お母さんから授かったこの「いのち」に、量りなき喜びを味わってこそ「寿命」を生きるという意味になります。

しかし、私たちは日ごろどのように「寿命」という言葉を使っている

かというのと、「寿命だからしかたがない」「寿命には勝てん」と言います。「勝てん」とか「しかたがない」という考え方でしか「寿命」という言葉を耳にしておりません。そこからはもう何も展開しない。それは仏教の「いのち」ではありません。

「いのち」とは、本来そんな意味ではないのです。お父さん、お母さんから授かった限りある「いのち」に、限りなき喜びを得る。これが「寿命」を生きるということです。この「寿」は量りなき喜びのいのち、「無量寿」です。「無量寿」というのをインドの言葉では「アミータ」と言い、中国で「阿弥陀あみだ」という漢字が当てられました。阿弥陀の「いのち」を生きてこそ、この世に生まれた値打ちというものが与えられる。阿弥陀の「いのち」を生きるということが、「寿命」を生きるということなの

です。だから「寿命」という言葉から推しはかってみるに、この世に生まれた我々は阿弥陀の「いのち」、すなわち「寿」にあ遇われない限り、喜びの「いのち」とはなりません。

五体満足の「いのち」も、量りなき喜びにあ遇われない限りは、「おもしろくない」と愚痴ぐちるような「命」にあしかならない。ところが、量りなき喜びの阿弥陀の「寿」に出遇って、親から授かった「命」を喜んでいけた中村久子さんこそ「寿命」を生きた人です。「寿」にあ遇われない限りは、「寿命」を生きたことにはなりません。

「いのち」を生きるということについて、どういことが本当に満足する「いのち」なのか。お父さん、お母さんから授かったこの「命」は、この「寿」ということを求めている。喜べる「いのち」を求めている。